

村人「火事だー、火事だー、」  
と、叫ぶ大声が聞こえます。

大変です。村の中が火の海になって、音を立てて燃え盛っています。村人たちは、火の見える方へ、火消道具を持って走っていきます。

その時です。みんなが口々に叫びました。

村人「おーい、藤樹さんの家が危ないぞー。みんな早く行って大事なものを全部出すんだー。」

自分の家にも火が近づいたり、燃えたりしているのかわまわずに、おぜいの村人が、書院の方へ走り出しました。

⑨ 火事は強い風にあおられて、どんどん広がりを見せています。藤樹書院にも火の粉が飛んできて、いつ燃え移るか危険な状態になって来ています。村人たちは、火の粉が飛び交う中で、頭から水をかぶって、



次々と書院の中へ飛び込みました。

巳之吉

「おーい、早くこれを出さな。」

五助「暗いから、

気をつけるよー。危ないぞー。」

みんなで声をかけ合いながら、次々と藤樹先生の残された大事な書物や遺品を運び出しました。

ようやく、すべての物を運び出したとき、書院にも火が移り、大きな炎に包まれ、燃えてしまいました。

⑩ 朝になって、ようやく火が消えたときには、小川村の半分以上の家が燃えてしまっ、大火事となっていたのでした。

家が燃えて、村人たちは住む家もなくなり、途方に暮れてしまいました。

五平「みんな、家も何もかもなくなっ



てしもうた。明日からどうしたらえらんやろか。」

物に、スズで黒くなった顔を、お互いに見合わせました。

兵七「でもな、藤樹さんの大事なものは、みんな運び出せてよかつたな。きつと、藤樹さんも喜んでくださってるよ。あしたか

ら、また、みんなで助け合ってがんばろうよ。」

兵七さんが、汚れた顔に涙を浮かべながら、みんなに声をかけました。

三吉「そうだ、そうだ。火事で亡くなった人は一人もないし、もう一度、みんな一緒に頑張ろう。」

そして、藤樹さんの書院も、もう一度立派なものを建てるんや。」

三吉さんも、みんなを励まして言いました。

みんな「ようし、わしらもがんばるでー。みんな力を合わせて自分の家も、藤樹さんの家も、建てるんやー。みんなががんばろう。」

「おー。」

みんなの力強い大きな声が、小川村中にびびき渡りました。

⑪ 小川村の大火事から二年後、藤樹先生が亡くなられてから二百三十四年経った、明治十五年（一八八二年）小川村の人たちや、近隣の多くの人たちの力によって、再び、新しい藤樹書院の、立派な建物が完成しました。

兵七「みんなよかつたな。多くの皆さんのおかげで、立派な藤樹書院が建ったよ。これからも、みんな仲良く、しっかりと藤樹先生の教えをみんなに伝えながら、書院やお墓を守っていこう。」

小川村の人たちの顔が笑顔で生き生きとしていました。



藤樹書院が新しくなつて百三十年年あまり過ぎました。今日も藤樹書院や先生のお墓は上小川の人々の手

により、きれいに掃除がされ、お花も飾られ、清く流れる小川とともに美しく守られて、藤樹先生を慕って訪れる、多くの人たちを迎えています。その陰には、藤樹先生の教えを、親から子へ、子から孫へと代々伝えつないで、今に至っている上小川の人たちを忘れてはいけません。しよう。

（おしまい）

今回の紙芝居は、「うそはつけぬ」を予定していましたが、紙面の都合等で「遺徳を守る人々」の紙芝居の紹介となりました。

（広報委員会）

